

李禹煥の芸術観と初期立体作品の関係について

野川勝稔（東京藝術大学）

本発表では、現代美術作家である李禹煥の「開かれた世界に出会う」という彼独自の用語を検討することを通して、李の芸術観を明らかにし、「関係項」をはじめとする彼の初期立体作品において、李の批評活動と作品がどのような関係にあったのかを考察する。

これまで一般的に考えられてきた李に対する評価は、彼がもの派と呼ばれる一群の作家たちに含まれることからわかるように、「もの」に焦点を当てて論じられることが多かった。たとえば、李が1968年に発表した石とガラスと鉄板によって構成されている作品「関係項」であれば、それぞれの素材が自然物と工業物の組み合わせであることを論じたり、もしくはガラスの脆い性質と石の硬い性質をもとに論じたりしているものであった。しかし、本発表では「開かれた世界に出会う」という彼の用語を手掛かりにこれまで語られることがあまり多くなかった角度から李の立体作品について論じる。

李は自身の批評の中で「開かれた世界」、「出会い」や「開かれた世界に出会う」という表現をたびたび使用する。この表現を理解するためには、李が日本大学文理学部哲学科在学中にリルケとハイデッガーの研究をしていた事、そしてその内容を確認しなければならない。なぜなら、この「開かれた世界に出会う」という表現は、ハイデッガーのリルケ論から引用していると考えられるからである。したがって、「開かれた世界に出会う」という彼の用語を明らかにするために、李の日本大学時代のハイデッガーやリルケの研究を検討したい。加えて、実際に「開かれた世界に出会う」という表現が使われている評論を取り上げ、その用語の意味内容を具体的に確認したい。取り上げる評論は1968年に書かれた「存在と無を越えて—関根伸夫論」であり、この批評のなかで李は関根伸夫の油土を用いたパフォーマンスや関根の代表作である「位相—大地」について論じている。李はこの関根の「位相—大地」を、従来の表象作業によるオブジェ的な作品とは違ったものと見なし、「出会い」や「開かれた（世界）」という言葉を用いて高く評価している。

次に、明らかになった李の芸術観を念頭に、彼の初期立体作品について検討する。上述した李の芸術観をもとに彼の作品を眺めてみると、李が必ずしも「もの」に焦点を当てていたのではないことがわかる。そしてそのことは、李の批評活動と作品制作の間に、一貫して共通する芸術観があることを示している。